

Tattvatrayanirnayavivṛti 和訳

片岡 啓

南アジア古典学 第3号 別刷
2008年7月 発行

Tattvatrayanirṇayavivṛti 和訳

九州大学 片岡 啓

はじめに 本稿は *Bhaṭṭa Rāmakanṭha* (後 950–1000 頃) 作 *Tattvatrayanirṇayavivṛti* (三原理確定注解) の和訳である。Rāmakanṭha はカシミール出身、同じくシャイヴァ・シッダーンタの神学・教理学者として知られる *Bhaṭṭa Nārāyaṇakanṭha* の息子であり、シャイヴァ・シッダーンタ神学の教理を整備した *Sadyojyotis* (後 675–725 頃) の諸著作ほかへの註釈を数多く残している。*Sadyojyotis* (別名 *Khetapāla*) に関しては Sanderson [2006b], *Rāmakanṭha* の系譜・年代・著作の詳細は Goodall [1998] を参照されたい。

本稿成立の経緯について簡単に述べておく。筆者は「新発見シヴァ教神学文献 *Tattvatrayanirṇayavivṛti* の研究」と題し、平成 19 年度日本学術振興会外国人招聘研究者として、ドミニク・グッドール教授を九州大学に招聘した。氏はフランス極東学院 (École française d'Extrême-Orient) ポンディシェリ校の所長であり、Jean Filliozat 以来の伝統ある研究所において様々なプロジェクトを企画・運営するとともに、シヴァ教研究その他の分野で、既に多くの著作を残している。以下が氏の著書リストである。(編著・共著を含む。ただし論文は除く。)

Goodall, Dominic

- 1996 *Hindu Scripture*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
(R.C. Zaehner のアンソロジーの追補版・編著)
- 1998 *Bhaṭṭa Rāmakanṭha's Commentary on the Kirāṇatantra. Volume I: chapters 1–6. Critical edition and annotated translation*. Pondichéry: Institut Français de Pondichéry / École française d'Extrême-Orient.
- 2003 *The Raghuvamśa of Kālidāsa with Its Earliest commentary: the Raghupañcikā of Vallabhadeva. Critical edition, introduction and notes. Vol. 1*. Groningen: Egbert Forsten. (Harunaga Isaacson との共著)
- 2004 *The Parākhyatantra. A scripture of the Śaiva Siddhānta. A critical edition and annotated translation*. Pondichéry: IFP / EFEO.
- 2005 *The Pañcāvaraṇastava of Aghorāśivācārya. A twelfth-century South Indian prescription for the visualization of Sadāśiva and his retinue*. Pondichéry: IFP / EFEO. (共著)

Tattvātrayanirṇayavivṛti は、これまで散逸したと考えられていた。ラクナウの Akhila Bhāratīya Sanskrit Parisad を訪問した際、筆者は偶々リスト中に同書を見出し、旧知のグッドール教授に報告、それが現存唯一の写本と判明した次第である。グッドール教授は写本に基づき校訂を開始、異読表・平行句などの校訂本のチェック、および、英訳の仕上げの段階に差し掛かっていた。そこで筆者は招聘を企画、タントラに広く通じる Diwakar Acharya 博士（京都大学講師）を入れて、原稿を読み合わせることになった。研究会においてグッドール教授は校訂本と英訳を完成させ、同時平行で筆者は和訳を準備することにした。脚注に付すべき専門的な議論は全て英訳に譲った。いまだ本邦に馴染みの薄いシヴァ教の紹介に拙訳が役立てば幸いである。

研究会には京都大学の横地優子准教授にも加わっていただき、京都大学での企画一切を主宰していただいた。京都大学での講演会その他でお世話になった藤井正人教授、赤松明彦教授に感謝する。東京大学の永ノ尾信悟教授には、東京での企画を主宰していただいた。読書会のほか、福岡・京都・東京で行なわれた講演会は以下の通りである。

- 2008年3月8日（土）：The Temple in South India and the Śaivasiddhānta（九州大学文学部）
- 2008年3月21日（金）：Cambodian Inscriptions of the Seventh Century（京都大学人文科学研究所）
- 2008年3月27日（木）・28日（金）・29日（土），連続講演：The Forefront of Shaiva Studies（東京大学東洋文化研究所）

シャイヴァ・シッダーンタの伝統と Rāmakanṭha の位置づけ 以下、サンダーソン教授 (Prof. Alexis Sanderson) の記述（特に Sanderson [1988]）に基づきながら、シヴァ教およびシャイヴァ・シッダーンタの伝統について概観する。

「シヴァ派」(śaiva) と呼ばれるものは、シヴァ神を信奉するものだけでなく、シヴァの妃、女神 (devī) を信奉するものまで含む。一部の教典においては男性神の存在は希薄になり、必ずしもシヴァに従属しない女神が中心を占めるようになる。いわゆるシャークタ派 (śākta) までも含む。

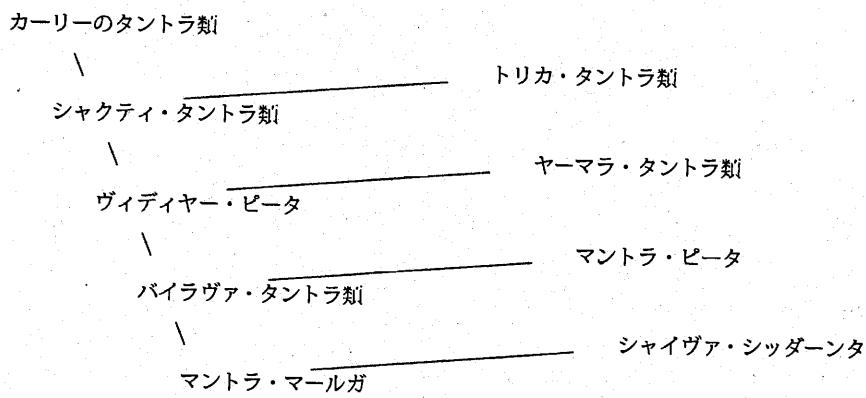
シヴァ派の教典は大別すると三分される。まずディークシャーという聖別式を前提としない在俗信者のシヴァ、ルドラ、マヘーシュヴァラ信仰である。これは Śivadharma や Rudrabhakti と呼ばれる。これにたいするのが、イニシエーションであるディークシャー聖別式を前提とする〈超道〉 Atimārga と〈マントラ道〉 Mantramārga である。

1. 在俗シヴァ信仰 Śivadharma/Rudrabhakti
2. 超道 Atimārga
3. マントラ道 Mantramārga

〈超道〉に含まれるのが、シヴァ教の最も古い形態である獣主派 (Pāśupata) や、そこから派生したラークラ派である。ここでの主体は、解脱を目指す出家修行者である。

これにたいして、苦行者と家長が主体となり、解脱のほか（むしろ）各自の希望する世界での快楽の享受 (bhoga) 特に超能力の成就 (siddhi) を目指すのが〈マントラ道〉である。〈マントラ道〉は〈超道〉から発展してきたものである。相手のシステムを取り入れながら、その上に新たな要素を付加することで、相手の上を行き、より多くの信者を惹き付けようとする。シヴァ派の諸伝統は、儀礼・図像・マントラ・誓戒の「最新テクノロジー」の各派での競争の結果、生まれてきたものと見なせる。

〈マントラ道〉には二種の聖典がある。10のシヴァ聖典 (śivāgama) と18のルドラ聖典 (rudrāgama) が一つ、もう一つがバイラヴァ聖典 (bhairavāgama) である。シャイヴァ・シッダーンタが依拠するのは前者である。祀られるシヴァの基本イメージは火葬場で髑髏を身に付けるシヴァであるが、バイラヴァ（畏怖）の側面を欠く。女性原理は抑制され、毎日の儀礼においては妃を伴わない男性神が祀られる。女性原理である「力」 (śakti) は強調されることなく、抽象化される傾向にある。また不浄物は排除され、酒・血・肉が用いられることはなく、浄化が図られている。サンダーソン教授は、〈マントラ道〉に属す各派の関係・派生を次のように整理する (Sanderson [1988:669] の図を参照)。



ここに明らかなように、シャイヴァ・シッダーンタは、〈マントラ道〉の各派生の根本に位置し、その教義はシヴァ教諸派の手本となるものである。獣主派やラークラ派の教義に通じることが、後5世紀から成立したと考えられるシャイヴァ・シッダーンタの聖典、たとえば *Niśvāsatattvasaṃhitā* (恐らく後6世紀頃) の教義を理解するのに必要不可欠であるのと同様に、シャイヴァ・シッダーンタの教義に通じることは、後代のシヴァ教諸派、例えば

影響力の強い *Svacchandatantra* (マントラ・ピータに分類), さらに, *Svacchanda* を通じて *Tantrasadbhāva* などの Trika の教義, さらに, *Kubjikāmata* などのカーリーのタントラ類の教義を理解するのに必須の前提となる。このことは例えば, 各派の *bhuvanādhvan* (地平, 低位から高位に昇っていく到達世界のレベル) の理論比較から明らかとなる。

また, このような発展段階が, 所作 (*kriyā*) → 行 (*caryā*) → 瑜伽 (*yoga*) → 上瑜伽 (*yogottara*) → 無上瑜伽 (*yogānuttara*) というインド密教の発展段階と平行することにもサンダーソン教授は注意を向けている。Sanderson [1988:678] によれば, シャイヴァ・シッダーンタのサダーシヴァ信仰は, 行タントラの『大日経』や, 瑜伽タントラ『金剛頂経』(初会『真実摂経』) の稳健な大日如来 (*Mahāvairocana*) 信仰に比せられる。

以上のような発展段階を経るシヴァ教の早い段階で, シャイヴァ・シッダーンタの聖典である *Svāyambhuvasūtrasamgraha* や *Rauravasūtrasamgraha* に依拠しながら教学を整備し体系付けたのが Sadyojojyotis である。

1. *Svāyambhuvasūtrasamgraha* への註釈 : *Svāyambhuvasūtrasamgrahavṛtti*
2. *Rauravasūtrasamgraha* への註釈 : *Mokṣakārikā, Bhogakārikā, Paramokṣanirāsakārikā*
3. *Nareśvaraparīkṣā*

Rāmakanṭha は, このうち, *Paramokṣanirāsakārikā, Mokṣakārikā, Nareśvaraparīkṣā* への註釈を残している (Goodall [1998:xviii–xix])。本稿で訳出する *Tattvatrayanirṇayavivṛti* は, Sadyojojyotis の *Tattvatrayanirṇaya* への註釈であり, 上のリストに追加されるべきものである。

シヴァ教研究の現在 A. サンダーソン教授により, シヴァ教研究は格段に進歩を遂げた。ここでは, サンダーソン教授と, 彼の下で学んだ研究者を中心に, この分野の最新の研究動向を概観する。専門雑誌への投稿が少ないが故に寡作と誤解されているが, サンダーソン教授は既に多くの (時には 100 頁を越えるほど巨大な) 論文を発表している。また初著書となるモノグラフ (200?) も間もなく出版される¹。以下は著作リストの抜粋である。

Sanderson, Alexis

- 1985 “Purity and Power among the Brāhmans of Kashmir.” In *The Category of the Person: Anthropology, Philosophy, History*. Ed. M. Carrithers, S. Collins and S. Lukes. Cambridge: Cambridge University Press, 190–216.

¹ 著作リストは <http://alexissanderson.com/aboutus.aspx> に, 論文 PDF へのリンクと共に公開されている。

- 1986 "Māndala and Āgamic Identity in the Trika of Kashmir." In *Mantras et Diagrammes Rituelles dans l'Hindouisme*. Ed. Andre Padoux. Paris: Editions du Centre National de la Recherche Scientifique, 169-214.
- 1988 "Śaivism and the Tantric Traditions." In *The World's Religions*. Ed. S. Sutherland, L. Houlden, P. Clarke and F. Hardy. London: Routledge and Kegan Paul, 660-704. [Reprinted in *The World's Religions: The Religions of Asia*, edited by F. Hardy. London: Routledge and Kegan Paul (1990), 128-72.]
- 1990 "The Visualization of the Deities of the Trika." In *L'Image Divine: Culte et Méditation dans l'Hindouisme*. Ed. A. Padoux. Paris: Editions du Centre National de la Recherche Scientifique, 31-88.
- 1992 "The Doctrine of the Mālinīvijayottaratatantra." In *Ritual and Speculation in Early Tantrism. Studies in Honour of Andre Padoux*. Ed. T. Goudriaan. Albany: State University of New York Press, 281-312.
- 1995a "Vajrayāna: Origin and Function." In *Buddhism into the Year 2000. International Conference Proceedings*. Bangkok and Los Angeles: Dhammadhāya Foundation, 89-102.
- 1995b "Meaning in Tantric Ritual." In *Essais sur le Rituel III: Colloque du Centenaire de la Section des Sciences religieuses de l'Ecole Pratique des Hautes Etudes*. Ed. A.-M. Blondeau and K. Schipper. Louvain-Paris: Peeters, 15-95.
- 2001 "History through Textual Criticism in the Study of Śaivism, the Pañcarātra and the Buddhist Yoginītantras." In *Les Sources et le temps. Sources and Time: A Colloquium, Pondicherry, 11-13 January 1997*. Ed. François Grimal. Pondichéry: Institut Français de Pondichéry/ École française d'Extrême-Orient, 1-47.
- 2002 "Remarks on the Text of the Kubjikāmatatantra." In *Indo-Iranian Journal* 45, 1-24.
- 2003-04 "The Śaiva Religion Among the Khmers, Part I." In *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* 90-91, 349-463.
- 2004 "Religion and the State: Śaiva Officiants in the Territory of the Brahmanical Royal Chaplain (with an appendix on the provenance and date of the Ne-

- tratantra)."* In *Indo-Iranian Journal* 47, 229–300. (Actual publication date: 2005.)
- 2005 "A Commentary on the Opening Verses of the *Tantrasāra* of Abhinavagupta." In *Sāmarasya: Studies in Indian Arts, Philosophy, and Interreligious Dialogue in Honour of Bettina Baumer*. Ed. Sadananda Das and Ernst Furlinger. New Delhi: D.K. Printworld, 89–148.
- 2006a "The Lākulās: New Evidence of a System Intermediate between Pāñcārthika Pāśupatism and Āgamic Śaivism." In *The Indian Philosophical Annual* 24, 143–217.
- 2006b "The Date of Sadyojyoti and Br̥haspati." In *Cracow Indological Studies* 8, 39–91. (Actual publication date 2007.)
- 2007a "Swami Lakshman Joo and His Place in the Kashmirian Śaiva Tradition." In *Samvidullāsaḥ*. Ed. by Bettina Baumer and Sarla Kumar, New Delhi: D.K. Printworld, 93–126.
- 2007b "The Śaiva Exegesis of Kashmir." In *Mélanges tantriques à la mémoire d'Helene Brunner / Tantric Studies in Memory of Helene Brunner*. Ed. by Dominic Goodall and Andre Padoux, Pondichéry: Institut Francais d'Indologie/École Francaise d'Extrême-Orient, 231–442 and (bibliography) 551–582.
- 2007c "Atharvavedins in Tantric Territory: The Āṅgirasakalpa Texts of the Oriya Paippalādins and Their Connection with the Trika and the Kālikula, with Critical Editions of the *Parājapavidhi*, the *Parāmantravidhi*, and the **Bhadrakālīmantravidhiprakarana*." In *The Atharvaveda and its Paippalāda Śākhā: Historical and Philological Papers on A Vedic Tradition*. Ed. Arlo Griffiths and Annette Schmiedchen. Aachen: Shaker Verlag, 195–311.
- 2007? *Religion and the State: Initiating the Monarch in Śaivism and the Buddhist Way of Mantras*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag. Ethno-Indology, Heidelberg Studies in South Asian Rituals 2.

リストから分かるように、最近になって矢継ぎ早に、これまでの長い研究の成果を公開している。シャイヴァに関する多くの著書を有する Mark Dyczkowski も、サンダーソン教授の下で学んだ一人であり、未発表の講義原稿・資料を有するサンダーソン教授に多くを負っている。Anthony Tribe も初期の学生の一人である。

サンダーソン教授がアビナヴァグプタの主著 *Tantrāloka*を中心としながら関連諸文献を涉猟していくのに対して、門下のグッドール教授は、シャイヴァ・シッダーンタ文献の教理を主対象とする。グッドール教授のオックスフォード大学提出の博士論文は *Kiranāgama*へのラーマカンタ註の校訂・訳注研究であり、また、ハーバード大学提出の教授資格論文は *Parākhyatantra* の校訂・訳注である。また教理だけでなく、*Pañcāvaraṇastava* の研究に見られるように、儀礼・図像にも最近は関心領域を広げている。

シヴァ派のヨーガを研究する Somdev Vasudeva は、オックスフォード大学提出の博士論文 *The Yoga of the Mālinīvijayottaratantra* をポンディシェリから出版している²。*Mālinīvijayottaratantra* は、パラー・パラーアパラー・アパラーという三対の女神を祀るトリカの伝統に属する。同じくトリカの伝統に属す *Siddhayogeśvarimata* を博士論文で取り上げたのがサンダーソン門下の Judit Törzsök である。また、Alex Watson は、Rāmakanṭha の *Nareśvaraparikṣāprakāśa* を博士論文で取り上げ、そこに展開するシャイヴァ・シッダーンタのアートマン論を跡付けている。成果はウィーンから出版されている³。*Śivasamhitā* や *Gerāndasamhitā* の英訳を出版している Sir James Mallinson は、サンダーソン教授の下、*khecarīvidyā*について博士論文をまとめている⁴。アビナヴァグプタの *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī* の研究を進める Isabelle Ratié は、博士課程在学中ながら、既に再認識派に関する論文を *Indo-Iranian Journal* 他に発表している⁵。

インド密教の分野では、Elizabeth English がオックスフォード大学提出の博士論文 *Vajrayoginī* を Wisdom Publications より出版している⁶。また本邦からは種村隆元がカトマンドゥの仏教僧 Kuladatta の儀礼マニュアル *Kriyāsangrahapañjikā* をオックスフォード大学提出の博士論文にまとめ、Groningen より出版している⁷。

その他、門下生ではないが、マールブルク大学の Jürgen Hanneder も、アビナヴァグプタの *Mālinīstokavārttika* をマールブルク大学提出の博士論文にまとめるにあたって、オッ

² *The Yoga of the Mālinīvijayottaratantra*. Pondichéry: EFEO/ IFP, 2004.

³ Alex Watson: *The Self's Awareness of Itself. Bhatta Rāmakanṭhas's Arguments against the Buddhist Doctrine of No-Self*. Vienna: De Nobili Research Library, 2006.

⁴ Sir James Mallinson: *The Khecarīvidyā of Ādinātha: A Critical Edition and Annotated Translation of an Early Text of Hathayoga*. London/New York: Routledge, 2007. なおマランソン卿は、パラグライダーのイギリストオープン優勝経験者 (Winner of the UK Paragliding Open 2006) でもある。

⁵ Isabelle Ratié: "La mémoire et le Soi dans l'*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī* d'Abhinavagupta." *Indo-Iranian Journal* 49 (2006), 39–103(65).

⁶ Elizabeth English: *Vajrayoginī: Her Visualization, Rituals, and Forms*. Massachusetts: Wisdom Publications, 2002.

⁷ Ryūgen Tanemura: *Kuladatta's Kriyāsangrahapañjikā. A critical edition and annotated translation of selected sections*. Groningen: Egbert Forsten, 2004.

クスフォードに滞在、サンダーソン教授より学んでいる⁸。*Tattvaprakāśavṛtti*を研究したJörg Gengnagelも同様である⁹。ヴィシュヌ教の研究を進めるSrilata Ramanもサンダーソン教授の下で学んでいる¹⁰。

ハーバード大学のHarunaga Isaacson教授も、ポスドク研究員としてオックスフォード大学に所属した時に、サンダーソン教授から学んでいる。氏はハーバード大学のアジア・アフリカ研究所内にThe Centre for Tantric Studies (CTS)を立ち上げ、京都大学のDiwakar Acharya博士、フランス極東学院のDominic Goodall教授、オックスフォードのAlexis Sanderson教授、ナポリ大学のFrancesco Sferra准教授、オーストリア科学アカデミーの苦米地等流博士との連携の下、タントラ研究を推進している¹¹。特筆すべきは、フランス側のグッドール教授とドイツ側のアイザクソン教授が共同で進めるEarly Tantra Projectが、ANR (Agence Nationale de Recherche)とDFG (Deutsche Forschungsgemeinschaft)の採択を受け、本格的に活動をスタートしたことである。今後、基本文献の校訂、そして、シヴァ教・ヴィシュヌ教・密教・サウラ派の比較研究の進展が期待される。

内容概観 以下、サディヨージョーティスの『三原理確定』とラーマカンタの注解に沿って、簡潔に内容を見ておく。三原理というのは、36原理（本稿末Appendix参照）の最上位原理であるシヴァ、そして個々の生類の精神原理である個我(puruṣa)、および現象世界の根本原因である根本物質(māyā)の三つである。神・人・世界に相当し、獸主派に説く主(pati)・家畜(paśu)・索縄(pāśa)に対応するものである。しかし科文から明らかのように、本書はこの三原理とは別に個我を覆う垢(mala)という概念を導入する。この〈垢〉の変容(parināti)・熟成(paripāka)、それに付随する教理上の問題こそ本書の主眼とするところである。

ここでいうシヴァは、最高主宰神(parameśvara)の他に、下位にある「解脱したシヴァ」(muktaśiva)なども含んでいる。自在者(iśvara)たるこれらシヴァ達のうち、最高主宰神の全知全能だけが無始に發揮されている。これにたいして〈解脱したシヴァ達〉は、最高主宰神のおかげで無垢となり全知全能を發揮するようになる。

個我も本来的には全知全能であるが、無始なる垢に覆われているがために、その全知全能を發揮することができない。また個我は、自力で垢を取り除くことはできない。それは目

⁸Jürgen Hanneder: *Abhinavagupta's Philosophy of Revelation. Mālinīślokavārttika I*, 1-399. Groningen: Egbert Forsten, 1998.

⁹Jörg Gengnagel: *Māyā, Purusa und Śiva: die dualistische Tradition des Śivaismus nach Aghorāśivacāryas Tattvaprakāśavṛtti*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1996.

¹⁰Srilata Raman: *Self-Surrender (Prapatti) to God in Srivaishnavism: Tamil Cats or Sanskrit Monkeys?* London/New York: Routledge, 2007.

¹¹<http://www.tantric-studies.org/>

を覆う膜のように実在する物質 (dravya) であり、ヴェーダーンタなどが立てる無明のように単に「知る」ことでなくなるものではない。解脱にはシヴァによるディークシャーという手術が必要なのである。シヴァは垢により人々を閉じ込め支配するとともに、人々から垢を取り除き浄化するものもある。このようにシヴァによって束縛が停止し (bandhanivṛtti), シヴァ性が開顯すること (śivatvābhivyakti) で人々は解脱し「シヴァに等しいもの」となる。ただし三元論に立つシャイヴァ・シッダーンタにおける解脱とは「シヴァに等しいものになること」 (śivasamatva) であって、一元論のように「シヴァの中に融没すること」 (śivalaya) ではない。シヴァと個我とは絶対的に異なるものである。

我々の如き通常の人々である「カラーを伴った者」 (sakala) は三種の束縛 (bandha) を受けている。根本物質からなる束縛 (māyīya), カルマからなる束縛 (kārma), 個我に属する束縛 (āṇava) すなわち垢 (mala) である。世界が帰滅状態にある時には根本物質 (māyā) からなる束縛はない。この状態の個我を「帰滅による独存者」 (pralayākala/pralayakevalin) と呼ぶ。カルマからなる束縛を全て滅した状態がその上にある。これが「智慧による独存者」 (vijñānākala/vijñānakevalin) と呼ばれるものである。通常我々が呼ぶ「解脱者」 (mukta) はこの段階に相当するが、シャイヴァ・シッダーンタでは、この段階でも個我にはまだ無始時以来の垢が付着しており、垢が熟成してシヴァに取り除かされることで初めて「解脱した者」になると考える。

垢は单数であるが、垢の能力 (śakti) は個我ごとに別々であり、結果として束縛は個我ごとに多様となりうる。全個我が同時に解脱する恐れはない。シヴァは各個我に合わせて垢を変容させ、熟成させ、解脱に至らせる。各個我の多様なカルマが消費されるよう、様々な経験を可能にする現象世界を根本物質からシヴァは作り出して与えるのである。ただし垢が働きを停止するまでは、垢の能力をオンにし、個我の力を閉じ込めるようにする。カルマの熟成と同様、垢の熟成は段階を経て進んでいく。このように垢が单数ではあるがその能力が多数であることは、シヴァの教典に基いて理解可能である。

垢の熟成・変容を主張するサディヨージョーティスにたいしては、個我の垢の熟成を神が考慮するならば、最高主宰神は垢に「依存する」ことになるのではないか、それゆえ「自在者ではない」ということになってしまふのではないかという反論がある。「(非他依存的) 自立的シャクティ降下論」 (svatantraśaktipātavāda) からの批判である。シヴァは自在者である以上、各個我の垢やカルマの熟成度などに依存することなく、自らの欲求に沿って自由に（悪く言えば恣意的に）個我を解脱させ得るという立場である。これにたいして定説では、最高主宰神が各個我の垢を考慮することは彼の主体性である自立性 (svatantratā) を損なうものではないと結論して、「垢の熟成」 (malaparipāka) という考え方を擁護する。シヴァ教の中に様々な解脱理論のあったことが知られているが、本書では「自立的シャクティ

「降下論」と自説の「垢の熟成」とを対比しながら、後者の理論的確立をサディヨージョーティスとラーマカンタは図っているのである。

なお以下の和訳にあたって、解釈上の問題点、他の解釈の可能性、著者情報源、他文献との平行句など、文献学上必要な注記については基本的に英訳に譲った。そちらを参照されたい。また横地優子先生には最終稿に目を通していただき有益な助言をいただいた。記して感謝する。

Sadyojyotis 作 *Tattvatrayanirṇaya* 詩節の科文 Rāmakanṭha の *Tattvatrayanirṇaya-vivṛti* は、Sadyojyotis の *Tattvatrayanirṇaya* への註釈である。著作全体の構造を概観できるよう、以下に *Tattvatrayanirṇaya* の詩節科文を作成する。

1 序

| | |
|---------------------|-----|
| 1.1 帰敬偈 | 1 |
| 1.2 関係・内容・目的 | 2 |
| 1.3 三原理：シヴァ・個我・根本物質 | 3-4 |

2 シヴァ（自在者）

| | |
|-------------------|-----|
| 2.1 諸自在者の共通性 | 5a |
| 2.2 最高の自在者（最高主宰神） | 5b |
| 2.3 解脱した自在者 | 5cd |
| 2.4 最高主宰神内の区別 | 6 |

3 個我

| | |
|--------------|---|
| 3.1 堀による閉じ込め | 7 |
| 3.2 非全知・非全能 | 8 |
| 3.2 シヴァによる支配 | 9 |

4 堀

| | |
|----------------------|-------|
| 4.1 人々の解脱の多様性 | |
| 4.1.1 個我的全知・全能の力の常住性 | 10 |
| 4.1.2 各個我毎の堀の諸能力 | 11 |
| 4.1.3 堀の変容 | 12 |
| 4.1.4 手段による上昇の違い | 13 |
| 4.1.5 各人対応の諸手段 | 14-16 |

4.2 堀の変容

| | |
|-------------------|---------|
| 4.2.1 創造・存続時 | |
| 4.2.1.1 堀を変容させる主体 | 17-19 |
| 4.2.1.2 解脱に相応しい手段 | 20-21ab |
| 4.2.2 帰滅時 | 21cd |

4.3 主宰神の自立性・恣意性をめぐる問題

| | |
|------------------------------|--------|
| 4.3.1 存続時 | |
| 4.3.1.1 非依存型シャクティ降下説への答弁 | 22 |
| 4.3.1.2 カルマの享受 | 23-25 |
| 4.3.1.3 前主張者からの反論 | 26abc |
| 4.3.1.4 定説からの回答：カルマと堀の熟成の同等性 | 26d-27 |

4.3.2 帰滅時

4.3.3 創造開始時

4.4 堀のまとめ

5 結

1 序

1.1 帰敬偈

シャンブよ、もし貴方の恩寵である〈シャクティの降下〉に鼓舞された〈智慧無垢なる者達〉が、部分に分かれることのない威力を持つ無垢な貴方を見るなら、論争者達の別・非別の議論も無駄になろう。

ここ（シャイヴァ・シッダーンタの体系）では確かに『原理綱要』等で36原理の確定が既に述べられたが、主要素である享受主体（個我）・享受対象（根本物質¹²）・享受付与者（シヴァ）という三原理について、その相互の、および、他の諸原理との、共通性・異質性に特徴づけられた〈事物の本質〉を確定するために、ここで新たに一書を説く。それに妨げなきよう、先ず、最高主宰神に〔サディヨージョーティスは〕敬礼する。

1. 束縛の多様性を観察してから自らの力で人々に様々な果報を与える、かの無始に卓越する、〔他に〕依拠することのない方に敬礼。

束縛——カルマからなるもの・根本物質からなるもの・個我に付着するもの——の多様性を理解してから、〈享受〉あるいは〈解脱〉および〈それぞれ（享受・解脱）を成就する諸手段に關係したもの〉という同じく多様な果報を人々に与える方に敬礼。

その〔三つの束縛の〕うち、カルマからなる〔束縛〕の持つ〈享受付与能力〉の多様性を理解してから、その〔享受のための〕根本物質からなる諸手段——〈限定的行為能力〉から〈地〔元素〕〉に至るまでの諸原理、および、それら（諸原理）を場所とする〔根本物質からなる不淨界で一番下の〈地〉という原理を場所とする〕〈劫末の火〔のルドラ〕〉から〔不淨界で一番上の〈限定的行為能力〉という原理を場所とする〕〈親指サイズ〔のルドラ〕〉に至るまでの諸地平、および、それぞれの地平に生じた無数の種類の諸身体、および、〔ブッディの状態である〕諸バーヴア（八性向）と諸プラティヤヤを内容とする経験内容——と結び付いた、それら（諸手段）の意識からなる多様な享受を彼は与える。

その時、同じそれ（カルマからなる束縛）の、智慧・ヨーガ・放棄あるいは享受（経験）による消滅を特徴とする多様性を理解してから、創造と帰滅と結び付いた〈帰滅による独存〉などの果報を〔彼は与える〕。

¹² シャイヴァ・シッダーンタにおいて māyā は三原理の一つとして神・個我とは別個の実在であり、実在する多様な世界を生み出す原因である。シャンカラのように幻としての世界を生み出すものではない。したがって「幻力」という訳語は避けた。

いっぽう個我に付着する〔束縛〕については、その熟成〔度〕という多様性を理解してから、〈非即座の涅槃〉等のディークシャーの多様性により、解脱の多様性を〔彼は与える〕。

そして以上を、自らの力である自らの偉大さのみによって彼は与えるのであって、〔自分とは〕別個にある他の手段によってではない。というのも、それ（別箇の手段）を用いるにしても、〔彼の〕力だけが主原因だからである。また彼は、無始なる卓越性——全知・全能からなる——を持つ、そのようなものである。無始に解脱した者という意味である。

1.2 関係・内容・目的

次に、帰敬に引き続いて、特定の人の資格〔の記述〕を先として、この著作の関係・内容・目的が〔述べられる〕。

2. さて、敬礼を受ける者達よ、タントラに関して智慧鈍き者達のために、師（シヴァ）から〔師資相承を経て〕学んだ或る〔特別な〕〈事物の本質〉（要義）を簡潔に私は述べよう。

敬礼を受ける者達よ、すなわち、敬礼に値する師達よ、或る〔特別な〕事物の本質、すなわち、今から述べられる〈三原理の共通性・異質性の確定からなるもの〉を、私は述べよう——というのは、これが本書の内容であるという意味である。そしてそれ（内容）は師から学んだ——というのは、最高主宰神から、教典の教示者達の〔師資〕相承によって得られたものであるという〔相伝の〕〈関係〉を述べている。このタントラへのディークシャーを必ず受けた智慧鈍き者達のためであるというのは、特定の有資格者に向けたものとしての本書の目的を述べている。

1.3 三原理：シヴァ・個我・根本物質

次のものが、その「事物の本質」と呼ばれるものである。

3. シャンブ、個我、根本物質。〔以上は〕常住で、遍在し、行為主体としての能力と結び付いたものである。派生物群が寝ていても、諸原理のうち三つは目覚めている。

シャンブとは——最高のシヴァ、および、解脱したシヴァ達と、サダーシヴァとイーシュヴァラ（主宰神）という二原理〔を含んだ〕——〈シヴァ〉という原理である。後述されるように、

それゆえ、変容を前提とする〔五つの〕御業は、主の上に無始に成立している。

また御業に関わる〈カラーを伴ったもの〉〈カラーを伴ったもの・カラーを伴わないもの〉〈カラーを伴わないもの〉の区別と〔して聖典で〕説かれるものも〔主の上に無始に成立している〕。(第六詩節)

いっぽう個我（プルシャ）というのは——都城（プル）なる身体、そこに横たわる（シャヤナ）に値する者で、適宜一つか二つか三つの束縛に縛られた〈家畜〉という原理である¹³。

また根本物質には上下がある。上位のものとは、〔七千万の〕マントラ・〔八〕マントレシュヴァラ¹⁴の住処たる〈純粹知〉という原理である。〔……いっぽう下位のものとは〈根本物質〉という原理である。〕聖なる『スヴァーヤンブヴァ』に説かれている通りである。

それ（下位の根本物質）から、時・限定的行為能力・制限¹⁵、欲望・〔限定的〕知、未開顕の〔原質〕および〔三〕徳性。覚原理から自我意識。〔自我意識から〕諸微細元素と諸器官。諸微細元素から諸元素。そしてすべてを彼は順番に創造した¹⁶。

諸原理のうち、以上のこの三つだけが常住である。他の原理は無常である。

さらに「遍在する」。同じこの三つは遍在者でもある。というのも根本物質も自らの結果を覆い尽くすからである。

また「サダーシヴァと主宰神という二原理も遍在するから、これ（定義）は不十分である」と言ってはならない。両者も、同じこの〔三原理〕の〔シヴァの〕うちに含まれるからである。このことは既に〔私が上で〕述べた。

さらに「行為主体としての能力を伴っている」。同じこの三つは、行為をする主体としての本性を持つものもある。根本物質も、後述する非精神性によって行為主体たりえない

¹³ カラーを伴う者 (sakala) は、個我に属するもの・カルマからなるもの・根本物質からなるもの(すなわち垢) という三つの束縛を有する。帰滅による独存者 (pralayākala, pralayakevalin) は個我に属するもの・カルマからなるものという二つの束縛を有する。智慧による独存者 (vijñānākala, vijñānakevalin) は個我に属する束縛である垢だけを有する。

| 束縛 bandha | 個我的 āṇava | 業的 kārma | 根本物質的 māyīya |
|-------------------|-----------|----------|--------------|
| 解脱者 mukta | | | |
| 智慧独存者 vijñānākala | ○ | | |
| 帰滅独存者 pralayākala | ○ | ○ | |
| カラーを伴う者 sakala | ○ | ○ | ○ |

¹⁴ 八人の mantreśvara とは : Ananta, Sūkṣma, Śivottama, Ekanetra, Ekarudra, Trimūrti, Śrikanṭha, Śikhandin.

¹⁵ kālakale の解釈については引用元である *Svāyambhuvasūtrasaṅgraha* 2.9–10b にたいする Sadyojojyoti's の解釈にしたがった。

¹⁶ Appendix の 36 原理の表を参照。

ので、[その] 原因としての側面が「行為主体性」と述べられている。言われている通りである。

諸行為参与者が発動しているにせよ停止しているにせよ、[それら諸行為参与者を] 主宰する者、彼 [こそ] が、発動しているにせよ停止しているにせよ、「行為主体」と呼ばれる行為参与者である。

マントラ・マントレーシュヴァラなどは行為主体であるが、彼らは〈個我〉の一種なので、これ（定義）は不十分ではない。

同様に〔根本物質の派生物である〕限定的行為能力などは「原因」ではあるが、それらを通して、可能力という形を取った根本物質のみが〔真の〕原因であるので、これ（定義）は不十分ではない。したがって問題はない。というのも、〈可能力としてあること〉こそが根本物質の本質だからである。

さらに「派生物群が寝ていても、三つは起きている」。〔劫末の火のルドラが根本物質原理までを焼き尽くす〕大帰滅の時、全ての他の〔低次の〕諸原理は〔根本物質に〕回収されるが、これら三原理だけは残るという意味である。

【問】このことは〔三原理の〕常住性を述べるだけで既に分かっていることではないか。

【答】たしかに。しかし異見を排すために再度述べたのである。というのも、『ラウラヴァ評釈』の作者（ブリハスパティパーダ）など或る者達は、大帰滅において、すなわち、アナンタ〔の位〕が回収されるとき、〔アナンタ以外の〕ヴィディイエーシュヴァラ（＝マントレーシュヴァラ）達〔の位〕が回収されることはない（＝残りのヴィディイエーシュヴァラ達が一人ずつ上のポストに繰り上がる）と主張しているからである。しかしそれは正しくない。同時に解脱するのが聖典に説かれているので、このように『ラウラヴァ註』において師（サディヨージョーティス）が示している。なぜなら『ラウラヴァ』において説かれているからである。

〔八人のマントレーシュヴァラ達の第一である〕アナンタが休むとき、彼ら偉大な転輪成王達に、全能者性の原因である最高の位（解脱）が与えられる。

聖なる『マタンガ』においても〔次のように説かれている〕。

〔根本物質より上の〕〈清浄なる道〉の主である神々（ヴィディイエーシュヴァラ達）と、その能力が必ず有効なマントラ達——彼らは各自の職務を成し遂げてから最高の位（解脱）に至る。

したがって矛盾はない。

以上、上の性質群をもって、この三原理の共通性と、他の諸原理との異質性とが述べられた。次に【三原理】相互についても、その二つ（共通性と異質性）が述べられる。

4ab. シヴァと個我とは無数であり、生み出すことなく、また、精神性（全知全能）を伴っている。

まずシヴァは、〈解脱したシヴァ達〉[がそこに含まれるの]を考慮することで、無数すなわち無限である。〈シヴァと等しくなること〉だけが、ここ（シャイヴァ・シッダーンタの体系）においては解脱であり、〈シヴァに融没すること〉[が解脱なの]ではない。

個我も数に関して無限である。個我が多数であることを、ここでは認めているからである。というのも、個我は、自己を認識し、また、他者を認識する以上、そのように〔複数のものとして〕成り立っているからである。アートマンが単一であるとは〔ここでは認めてい〕ないのである。このことは別の所で既に述べた。

【問】限定的行為能力なども、個我毎に異なるので、同じく無数ではないのか、『享受・解脱』に言われている通りである。

〔地に始まり〕 限定的行為能力に至る享受手段群は、各享受主体毎に限定されている。

【答】たしかに。だからこそ〔後から 11cd で〕 そのことも [サディヨージョーティスは] 述べるのである。しかしここでは、別の原理とではなく、根本物質と異質であることだけを説明すべきなので問題はない。

さらに「生み出すことなく」というのは、これら〔シヴァと個我の〕両者がともに変容しないということである。なぜなら、もしそうならば粘土などのように無情になってしまふからである。聖なる『キラナ』に述べられている通りである。

変容は無情にあり有情にはありえない。

また両者は精神性を伴っている。精神性を本質とするものに他ならないと言われているのであって、意官との結合などによって有情となるのではない。聖なる『マタンガ』において述べられている通りである。

精神（個我）にとり精神性は生まれながらの属性である。

次に根本物質について両者と異質であることが述べられる。

4cd. 根本物質という原理は一つであり、生み出すものであり、精神性を欠いている。

根本物質という原理は、ただ一つである。というのも、個我という原理のように多数だと分かる根拠がないからである。また〈魅惑すること〉のみが【すべての結果に共通して】随伴しているので、これはただ単数の原因として成立しているからである。生み出すものであるとは、変容するということ。というのも【根本物質は】限定的行為能力などの質料因としてのみ証明されるからである。また、だからこそ粘土のように無情である。また、このことは上位の根本物質についても【同じと】理解すべきである。

2 シヴァ

次に、ここで「シヴァと個我は無数である」と言うことで、「シヴァ」という語で指示される自在者（イーシュヴァラ）が多数であると説かれたが、彼ら（複数の自在者達）についても、共通性・異質性が述べられる。

5. 自在者達は【すべて、現実に】能力が発動している。それらのうち一者【だけ】が、無始に実現した諸属性に富んでいる。〈解脱した自在者達〉が無垢になるのは、また、[彼らの] 全知・全能は、彼から【もたらされる】。

それら（共通性・異質性）のうち、〈能力が発動していること〉——全ての対象に向かって認識・行為【能力】が発動していること——は、その【解脱した】状態においては、全ての自在者達に共通する。しかし、前の状態による違いがある。最高主宰神には、無始に成立した〈諸属性の豊富さ〉がある、すなわち、全能者性（全知全能）がある。いっぽう〈解脱した自在者達〉にとり、〈束縛の停止〉および〈シヴァ性の開顯〉は、かの最高主宰神から【もたらされる】。

このようなわけで

6. それゆえ、変容を始めとする諸々の御業は、主の上に無始に成立している。また【聖典で】説かれている〈カラーを伴ったもの〉〈カラーを伴ったもの・カラーを伴わないもの〉〈カラーを伴わないもの〉という御業に関する区別も【主の上に無始に成立している】。

それゆえに、諸々の御業——創造・存続・帰滅・閉じ込め・恩寵を本質とするもの¹⁷——の始めに、変化すなわち変容があるが、その諸々の御業は、かの主である最高主宰神の上

¹⁷ sthiti, samṛakṣaṇa, ādāna, anubhava, anugraha の解釈については英訳の脚注を参照。

に無始に成立しているのであって、〈解脱したシヴァ達〉の上にではない。というのも [彼らの場合、諸々の御業（のための能力）は] 始めがあって成立しているからである。

また御業に関して〈カラーを伴ったもの〉などの区別があるが、それも最高主宰神の上に無始に成立している。いっぽう〈解脱したシヴァ達〉の上には、始まりをもって成立している。

ここで、それ（最高主宰神）の内に含まれるものとして [〈カラーを伴ったもの〉などの区別が聖典で] 説かれているのであって、[最高主宰神と] 別箇 [のものとして] ではない。

ここで、御業に向けての可能態である〈カラーを伴わないもの〉の状態が「シヴァ」と言われている。いっぽう、それ（御業）に取り掛かった状態が、〈カラーを伴ったもの・カラーを伴わないもの〉の状態である「サダーシヴァ」である。いっぽう、行為を既に開始した状態が、〈カラーを伴ったもの〉の状態である「主宰神」である。というように、一つではあるが、このように、これには三原理の区別がある¹⁸。次のように言われている。

可能性を持つ者、取り掛かった者、行為開始した者。行為主体は三種が認められる。

聖なる『キラナ』においても [次のように説かれている]。

主宰神、サダーシヴァ、寂靜者（シヴァ）は、御業の違いによって分かれる。

いっぽうディークシャーなどによって、それ（三原理）の [それぞれの] 位に個我は到達するが、その [個我] にとっては、この三原理には実質的な区別がある。というのも、行為能力は、粗大・微細・最上の区別によって開顯するからである。このことは別の所（マタシガ注）で既に述べた。

3 個我

先に「シヴァと個我とは、無数であり、生み出すことなく、また、精神性を伴っている」と、シヴァと個我との共通性を述べた。次に異質性が述べられる。

¹⁸ 36 原理（本稿末 Appendix 参照）の上位にあるシヴァ・サダーシヴァ・イーシュヴァラに関する対応を表にすると以下のようになる。

| 原理 tattva | 状態 avasthā | 御業 kārya への態度 | 行為能力 sakti |
|-----------|---------------------|------------------|------------|
| śiva | niṣkalāvasthā | śaktatva | para |
| sadāśiva | sakalaniṣkalāvasthā | udyuktatva | sūksma |
| īśvara | sakalāvasthā | pravṛttakriyatva | sthūla |

7. シヴァの属性と同様、〈個我〉達の属性群（全知・全能）も全てに行き渡るが、彼らの場合、それは単一の垢に無始に閉じ込められている。

〈個我〉達の場合もシヴァの属性と同様、その属性群は全ての対象と結び付く。というのも〔個我達は〕認識者性・行為者性（認識能力・行為能力）を本性としているからである。

【問】主宰神のようにもし彼らにもこのような〔属性が〕あるならば、残らず全ての〔個我達〕が全知者等となってしまうという問題が生じるだろう。

【答】たしかに。しかしその属性群は、〈個我〉達の場合には、垢に無始に閉じ込められているので、そのようになってしまふことはない。

またここで「垢に無始に閉じ込められている」と言うだけで、垢もまた無始であることが成立したことになる。

いっぽう垢が単一であることは、無始に束縛するものであることが〈別様ではありえないこと〉だけを根拠として〔成立する〕。というのも、それが複数であれば、無情であるがゆえに原因を前提とすることになる以上、〔根本物質を前提とする〕限定的行為能力などと同じく始まりを持つことになるので、「無始に束縛すること」が見えなくなるからである。なぜなら垢が働きを止めた者にたいしては、シヴァの場合と同様、束縛は見えないからである。

【問】そのことから現在の主題〔である個我〕に関して何が言えるのか。

【答】答える。

8ab. それゆえ彼らは力の開顕なしでは非自在者に他ならず、非〔全〕知者・非〔全〕能者である。

このように、無始なる垢に束縛されているがゆえに、彼ら〈個我〉達は、非自在者であり、認識者・行為者としての力が未開顕の者なのである。というのも、垢が働きを止めたときにのみ、それ（力）は開顕するからである。だからこそ、

8cd. また彼らは、各自の力を自分自身で無垢で全てに行き渡るものにすることはできない。

その無知の原因〔である垢〕は、眼の汚れである膜などと同じく実在なので、智慧（その本質を知ること）により働きを止めることは見えない——もし可能ならば、アーティストならざるもの等にアーティスト等を附託することを内容とする精神上の無知が働きを止めると〔個我が能力を持つ〕と同様に、個我が能力を持つことになろうが——ので、眼

科医の手術によって膜などが「なくなるの」と同様に、ディークシャーという主宰神の働きによってのみ、それ（垢）は働きを止める。このことは聖なる『パウシュカラ』に述べられている。

人が自らの能力によって解脱に赴くことは決してない。

聖なる『スヴァーヤンブヴァ』においても【次のように述べられている】。

ディークシャーだけが【人を】解脱させる。そして、上に、シヴァの素晴らしい位に連れて行く。

したがって問題はない。

また同様に、

9. 垢に閉じ込められているので、それ（非自在者性等）と同様に、彼らには、無始なる〈シヴァによる支配〉がある。それゆえ彼らは、主にとっては、閉じ込められるもの、束縛されるもの、浄化されるもの、目覚めさせられるものである。

ちょうど垢によってもたらされている彼らの〈非自在者性〉等が無始であるのと全く同様に、シヴァの、すなわち、[シヴァ]に関わる支配という【シヴァに】〈監督されること〉は、作られたものではない、すなわち、同じく無始である。このように垢と結び付いていながらゆえに、彼らは、主にとっては、ヴァーマー〔シャクティ〕が垢を監督することで閉じ込められるもの、根本物質からなる束縛によって束縛されるもの、ディークシャーによって浄化されるもの、知識〔篇〕など〔からなる聖典〕によって目覚めさせられるものである。

4 垢

4.1 人々の解脱の多様性

これについて【個我とは】別箇の垢を否定するものとして【次のような】前主張が【ある】。

10ab. 【問】認識などの力が常住であれば、垢などの想定は望ましいだろうか。

【問】認識者性・行為者性からなる力が常住であるならば、すなわち、個我の本性として成り立っているならば、彼が、その状態において全知などになってしまふのを回避するた

めに、垢を想定すると主張するのは正しい¹⁹。[しかし我々の言うように] それが無常である場合には [垢をわざわざ想定する必要は] ない。というのも、その場合には、〈個我〉達そのものが無知を本性とすることが成立するので、[彼らと] 別箇のものとしての垢を立てるのは理に適っていないからである²⁰。

また [認識者・行為者としての力が] 無常である場合には、彼に結果・器官（微細・粗大な身体）が存在する場合にのみ [力が] 把捉され、それ（原因）が存在しない場合には [力は] 把捉されないので、別箇の垢の存在論証は捨てられることになる。以上のようにニヤーヤ学者などは [主張している]。

「垢など」の「など」を用いることで、その [垢の] 原因として、上に述べた〈非自在者性〉・〈閉じ込められるものであること〉などを想定する。

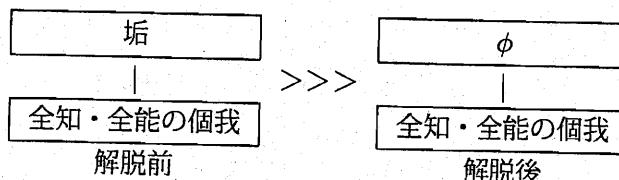
【答】以上に対して定説は、

10cd. 【答】たしかに、それは他 [の無常物] と同様ではない。[常住である。] というのも、そのような [常住な] ものとして [これは]、主宰神の上に常に経験されているからである。

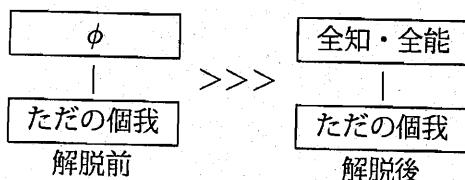
【答】確かにそうである。その力は、他のように、すなわち、無常物と同様に経験されるわけではない。常住にほかならないという意味である。なぜか。なぜなら、そのようなものとして、すなわち、常住なものとしてこれは主宰神の上に常に経験されているからである。次のような意味である。「個我の力であるそれも常住である。精神の力なので。主宰神の力と同様に。」ゆえに、前述の道理によって、別箇のものとしての垢が成立する。

【問】ではどうして結果・器官（微細・粗大な身体）が存在しない場合には [力は] 見られないのか。

¹⁹ 定説のように、認識者性・行為者性を本性として常住と認めるならば、輪廻状態における垢を想定するのもやむをえない。



²⁰ 逆に、認識者性・行為者性を無常、すなわち、後から獲得された力と考えるならば、無知・無能を説明するのに、別箇に垢を想定する必要はない。



【答】開顕する者がないことによると『原理綱要』において述べられている。

限定的行為能力などと結び付く以前には〔認識・行為能力は〕把握されないので、認識・行為〔能力〕は存在しない。

と論難がなされた後に、

〔両者が〕開顕する者を欠いているからこそ、そこ（個我）に両者が把握されないのであって、周知のように〔両者が〕存在しないからではない。

に始まる〔章句〕によって。

それゆえ垢に閉じ込められているので、主にとって彼らは束縛されるものと述べられたのである。それについて、もう一つの理由が追加される。

11ab. カルマと結び付いた時に垢は、輪廻するものが根本物質の変容体と結び付く原因となる。

〈個我〉達が根本物質からなる束縛と結合する原因是、単なる無限定の垢ではなく、カルマと結合した〔垢〕に限られる。

智慧・ヨーガ・放棄により、あるいは、享受（経験）により、カルマが消滅することで、〔彼等は〕〈智慧による独存者〉に〔いずれ〕なると、そこで説かれた。

と〔説かれている〕。

先に〔7cdで〕この垢は、全ての個我を覆うものとして单一であると説明されたが、その場合、違ひがないので、全ての個我が同時に束縛され、あるいは、解脱することになってしまう。そのため、次のことが〔説かれる〕。

11cd. また個我（アートマン）毎に、その属性を覆い隠す〈垢の能力〉も別々である。

同じ理由により、单一であるが、この垢の諸能力——彼ら〈個我〉達の属性を覆い隠すものは個我毎に別々と理解される。というわけで、上のような帰結が生じることはない。「また」という語により、上記の「根本物質の変容体」が、個我毎に同じく別々である〔ことが示唆されている〕。というのも、結果と器官〔からなる微細な身体〕が同一の場合には、全ての個我が全てを享受することになってしまうからである。『享受・解脱』において述べられた通りである。

さもないと、楽などの区別が現に見られるのは理に合わないからである。カルマに区別があることで理に適うようになるだろう。ただし、その【カルマの】区別が理に適うならばだが。

に始まる【章句】によって。

【問】もしそうだとすると（=個我毎に垢の能力が別々だとしても）、各自の〈垢の能力〉も単一である以上、[時間的に] 変化しないので、[各個我は] 常に束縛されるか解脱しているかになってしまう。

【答】それに答えて曰く、

12. 閉じ込めるものとしてその垢は変化しながら、時が原因で【変化して】、特定の変容（熟成）と結び付くことで、[特定の] 或る時、或る個我に、或る仕方で、個我の力から引き下がる。

[垢は] 個我の力から、すなわち、上記の認識者性・行為者性を本質とするものから一一閉じ込めるものとして、すなわち、能力を本質とする〈覆い〉として変容しつつ、特定の熟成度に達してから——引き下がる。聖なる『スヴァーヤンブヴァ』に述べられている通りである。

それが滅すると、最高の至福へ行こうとする欲求が生じるだろう。

またそれゆえに、それ（垢）の特定の熟成度がもとで、その垢は、或る時に停止するのであって、いつもではない。また、その熟成が【或る個我には】ないので、或る個我にとって【停止するの】であって全ての個我にではない。また、或る仕方でもって、すなわち、激しく・穏やかなどとの区別をもってである——このことは聖なる『キラナ』において説かれた。それゆえ【常に解脱しているか常に束縛されているかいずれかであるという】上のような帰結はない。

またそれが【停止するのは】「時」に基づく、すなわち、変容に基づく。これ（垢）が持つ〈変容を本性とするものとしての側面〉のみが【詩節で】「時」と言われている。というのも大帰滅時には通常の【意味での】時がないにもかかわらず、〈帰滅による独存者〉などは変容するからである。

次に、この帰結を排除するために、主宰神だけが原因であるとする〈[他に依存しない]自立したシャクティの降下〉を唱える者達は【言う】——「ならば垢について変容という本性を想定して何になろう、あるいは熟成という性質を想定して何になろう」と。それに答える。

13. だからこそ〈個我〉達には、手段に基づく卓越の違いが【上で】知られたのである。これは、そのように、時に基づいて、また、性質に基づいて【のみ】可能なのであって別様ではありえない。

このように〈個我〉達には、ディークシャーという手段によって、解脱を本質とする卓越の特定【度】のものが、「或る時に或る仕方で」あることが上で知られた、すなわち、理解させられた。それは、〈時〉——すなわち上記の、垢の変容を本性とするもの——に基づいて、また、性質——すなわち特定の熟成——に基づいて、可能なのであって、別様では、すなわち、主宰神のみに基づいてはありえない。彼もまた【他に依存せず】自立したものとして【各個我にたいして】違いがないので、また、欲望や憎悪などがありえないでの、上の帰結（全人同時解脱・束縛）は依然としてそのままである。

【問】そうすると垢の熟成などに依存するので彼（主宰神）は、これに関して非自立者（他依存者）であるなどの過失がある。

【答】機因に依存することは、【主宰神に】非自立性をもたらす原因ではない。享受に関してカルマに依存すること【が非自立性を主宰神にもたらす原因ではないの】と同様である。そうではなく【別の】主宰神に依拠していることが【非自立性の原因なのである】。そしてそのようなことは、一切を主宰する者である以上、彼（主宰神）にはありえない。このことは『個我・主宰神の考察』において述べられた。

好き勝手に他者に使役されないこと、行為手段などを使役する主体であること——行為主体の自立性とはこのことであって、カルマなどに依存しないことではない。

というわけで問題はない。

またそれゆえに、ここで上記の帰結（全人同時解脱・束縛）はない——ということが説かれる。

14. またこのように解脱の機因が無数であり、【それを論証する】正しい論理が存在するのを見てとて、主宰神は手段の無数を述べたのである。別のやり方ではない。

このように、垢の熟成を本質とする〈解脱の機因〉が、無数の個我に関わるので無数であり、個我毎に全く異なるのを、また、【それが】正しい論理——上記の推論——を論証のために備えているのを見てとてから、主は、それ（解脱）を実現するディークシャーという手段の無数を個々の聖典で説いたのであって、別のやり方ではない——というのは、

ここで、一人が解脱したからといって、全ての人が解脱するという過失に陥ることはない、という意味である。

また同様に、

15. 特定時に特定量の索縄とともに特定の個我にとり、垢は、真の至福（解脱）を妨げるが、その時、それら（索縄）が全て破壊されると²¹ [垢は] その個我を束縛するのを止める。

根本物質の変容体と結び付くことの原因は、カルマと結び付いた垢であると言われたが、根本物質からなる索縄とともに、或る個我に、或る時に、すなわち、それぞれのカルマの熟成時に、或る場所で、垢が「真の至福を妨げるものとなる」[すなわち] 下に抑え込むものとなるが、その個我にとって、その時・場所で、享受によりそれら（索縄）が破壊されると、それ（垢）も、束縛するのを止める²²。「混じってないものは変容しない」という原則により、垢が熟成する際には、[カルマからなるものと同様に] 根本物質からなる諸索縄も、働いているか停止しているか、いずれにせよ、補助因である。ちょうどシヴァ(sarva)の属性の卓越に際して、〈智慧による独存者〉[となる] 達にとって [根本物質からなる索縄が働きを停止することで補助因となる] ようにという意味である²³。

また次の理由からも、このことがある。

16. シヴァの教典においてこのようなものが〈真の解脱〉の諸手段として知られているからである。さもなくば、それらも理に合わなくなる。

最高主宰神のこの教典においては、まさにこのようなものが [すなわち] 各場所での享受を通じてのみ根本物質に由来する索縄を打ち壊すものが、〈解脱の手段〉として知られている。そのことからも、根本物質からなるそれら（索縄）が打ち壊されると、それぞれの場所で垢は、それぞれ [の個我] を束縛することをやめると理解される。さもないと、それらの手段も理に合わなくなってしまうからである。というのも理由なく [解脱を妨げる束縛とは異なる] 別の束縛を消滅させることになってしまふからである。

²¹ tāvadbhir vihataih を instrumental absolute と解釈したが、saha を補って「破壊されたそれら（全ての索縄）とともに」という解釈も可能である。

²² 次のような解釈も可能である（英訳参照）。「根本物質からなる索縄とともに、或る個我に、或る時に、すなわち、それぞれのカルマが熟成し終わった時に、或る場所で、「真の至福を妨げるもの」[すなわち] 下に抑え込むものであるその垢も、その個我にとって、その時・場所で、享受により破壊されたそれら（索縄）全てとともに、束縛するのを止める。」

²³ この一文はテクストの状態が悪いこともあり、その意味は自明ではない。

4.2 堀の変容

4.2.1 創造・存続時

さて「〈個我〉達にも、シヴァの属性と同様、[遍在する] 属性群がある」に始まる以上 [の詩句] により、シヴァと個我的異質性の原因である堀の正体が確定された。次に、同じその [堀] の変容を確定するために、ここで [詩節の] 四分の一 (17a) でもって問が [立てられる]。

17a. 【問】いったい誰が堀を変容させるのか？

【問】堀の変容を想定する [定説側の] 立場では、ただ堀の本性上、堀は [それ自体で勝手に] 変容するので、それを変容させる誰がいるだろうか、誰もいやしない。したがって、解脱は堀の本性上成立したものに他ならず、主宰神を能作者とするものではなくなってしまう。というわけで、それ（主宰神を能作者とする解脱）が成立するために、〈自立した [恣意的な] シャクティの降下〉の立場のみを認めるべきである——以上が問の趣意である。

【答】いっぽう定説は、

17bcd. 【答】様々なカルマを見てとつてから、種子（根本物質であるマーヤー）から引き出して、手段とともに様々な享受を各個我に与える方。

18. また寝ている時に、種子を [享受を] 生み出し得るようにし続ける方。

また帰滅時に [種子の] 休息のために、その [種子の] 中に一切 [世界] を置く同じ方。

19. そして一切 [世界] が覚醒する時に、人々のカルマを享受に [相応しく] する方。

かの主宰神、堀を破壊してくれる方、力を付与してくれる方は、慈悲から常に、堀が停止するようにする。

その方、すなわち、主宰神は、多様なカルマを考慮して、人々に、種子から、すなわち、根本物質である質料因から、多様な享受を、諸々の原理・バーヴア・地平を本質とするその諸手段とともに生じさせてから与える。

また彼は、それ（種子）が、途切れなく無数の人々に享受を与え続けることができないのを悟って、大帰滅時に、それ（種子）の休息により、[種子を] それ（享受を与えること）ができるようにし続ける。

また彼により、その中に、すなわち、同じその種子の中に、一切 [世界]、すなわち、原理・バーヴア・地平などが、その [大帰滅] 時に、残らず全て、再び生じるように置かれる。

また彼は、創造時にも、カルマを人々が享受できるようにする。

そのような主宰神——垢を打ち壊す者として「垢の破壊者」であり、また人々に認識者性（全知）などの力を与えるので「力の付与者」である——は、常に、すなわち、毎瞬間、垢が停止するようにしている、すなわち、変容させている。

次のような意味である。ちょうど、根本物質・限定的行為能力等・カルマが変容を本性とするとしても、[あくまでも] 主宰神が創造・帰滅を作り出す主体なのであって、根本物質などの本性に基づいて創造・帰滅が成立しているわけではない、とあなたが認めているのと同様に、垢が変容するとする立場でも、主宰神のみが解脱させる主体であることは説明が付く。したがって、どうして〈自立したシャクティの降下〉が成立しようか。

だからこそ、

20ab. またそれ（垢）が停止する前に、[主宰神は] その能力が実を結ぶよう
にする。

垢が輪廻の原因として〔まだ〕変容（熟成）しない間、すなわち、それ（垢）の変容（熟成）より前には、主宰神は、むしろ人々の力を妨げる垢の能力そのものが実を結ぶようになる。そうであって、熟成することのないまま〔垢が〕停止することはない、という意味である。すなわち、

20cd-21ab. 個我の力を閉じ込めつつ彼は、索縄の力が実を結ぶのを見る。そ
して〔それを〕見てから、そこ（索縄）から〔個我が〕退くのに役だつよう、人々
が解脱するのに相応しい手段を適用する。

このように彼は、垢の能力を後押しすることで個我の力を閉じ込めつつ、最高主宰神としてその「垢」と呼ばれる索縄が持つ力が実を結ぶのを、すなわち、〈任務を成し終えたこと〉という特定の熟成〔の度合い〕を見る。というのも、あらゆるものにとって、任務は結果〔を出すこと〕で終わるからである。そして〔最高主宰神は〕それを見てから、その索縄から退くのに役立つよう、人々に、解脱をもたらすディークシャーという手段を適用する。

4.2.2 帰滅・睡眠時

【問】変容は結果であると言われている。根本物質 (māyā) にとっての限定的行為能力などのように、しかし垢は原質 (prakṛti) ではないので、〔それが〕結果を持つことはありえない、変容することは説明が付かない。

【答】これに答える。

21cd. 種子（根本物質）に睡眠時の変容が認められるように、垢には [個我の] 精神性を捨てるようとする [変容が認められる].

ちょうど世界の種子である根本物質に、睡眠時すなわち大帰滅時に、変容、すなわち、再創造を生み出すことになる〈付加的能力の獲得〉が、[根本物質] それ自体の変容のみから生じるのであって、結果である〈異種のものへの変容〉から生じるのではない——というのもその時には [原因としての根本物質しかなく] それ（結果としての異種のものへの変容）はありえないからである——それと同様に、垢は、別の結果の [素材となる] 原質ではないが、それ自体の内で変容する本性を備えているので、精神性を捨てることに関しても、そのような変容が生じるとすればよい、というわけで問題はない。

4.3 主宰神の自立性・恣意性をめぐる問題

4.3.1 存続時

これについて、〈自立したシャクティの降下〉を唱える者の疑問の後に [それを] 排する。

22. 【問】またもしシャンプが垢を停止するようにするならば、いったいどうして全ての個我に対して一斉にしないのか。【答】このように論難する者にも [次のように] 答えるべきである。

【問】垢が変容を本性とするとあなたは [わざわざ] 想定した後に、主宰神のみが、その [垢の] 熟成原因だと言ったが、[主宰神に、個我の垢との関係での] 差異はないのだから、すべての個我の [垢を一斉に] 彼は変容させることになってしまう。このように上 (11cd) [と同じ] 帰結が [やはり生じてしまう]。それゆえ否応なく、その [帰結を] 回避するために、これ（垢の熟成）に関して主が自立的（恣意的）であると、あなたは認めねばならない。それならば、それ（主の自立性）のみがあるとすればよい。垢の変容想定という余計な瘤が何になろう。

【答】このように論難する者に次のように答えるべきである。

どのように [答えるべき] かを [次の] 詩節の一部でもって応える。

23ab. どうして彼は全てのカルマを [人々が] 同時に享受できるようにしないのか。

あなた（〈自立したシャクティの降下〉論者）の立場でも、カルマによりこの理由（「違ひがないので」という理由）は不定となる²⁴。というのも——カルマを主宰神は変容させてから、それを個我が享受できるようにするという場合に、違いはないのだから、どうして、残らず全て〔のカルマ〕を同時に〔全ての個我が〕享受できるようにしないのか——以上の理由からである。

しかし——ちょうど君（反論側）がカルマについてのこと（帰結が不可避的に生じること）を了承しているのと同じように、私（定説側）にとって垢について〔帰結が不可避的に生じることが承認可能なものとして〕あるとすればよい（＝おあいこなので定説側の帰結については黙って見逃そう）——と〔反論者である君は〕釈明してはならない²⁵。なぜならそのように〔釈明するなら〕その反論者には、「立論者が述べた論証の過失を明らかにしない」という〈敗北の立場〉のみがあるからである。〔仏教徒が〕言うところの——

〔論争する〕両者にとり、〔立論者が〕非論証要素を述べること、〔反論者が〕過失を指摘しないことは、敗北の立場である。それ以外は〔敗北の立場としては〕不適当なので認められない。

——という〔敗北の立場の定義を〕認めたうえで〔サディヨージョーティスは〕これ(23ab)を〔反論者が定説側にたいして用いた「違ひがないので」という理由が〕「カルマによって不定となる」という過失を指摘するものとして述べたのである。

これ（カルマ）について、「違ひがないので」という理由の不定を回避する〔のに反論者が用いるだろう〕理由を〔サディヨージョーティスは〕排斥する。

23bcd. そこ（垢）において〔も〕捨てられてないので、多数であること・別の時に享受されること・強度に差異があることは、解決策になつてない。

【問】カルマについて「違ひがないから」というこの理由は成立していない²⁶。というのも、それ（カルマ）には——個我の違ひにより多数であること、同一個我においてすら異

²⁴ 反論者である「自立したシャクティの降下」論者が、定説を攻撃するのに用いる論証式は次のように再構成される。

【主張】〔主宰神は〕垢を全ての個我に同時に変容・熟成させることになつてしまう。

【理由】違ひがないので。

これにたいして定説側は、カルマを持ち出して不定を指摘する。違ひがないにもかかわらず、カルマの場合、全ての個我に同時に変容することはないからである。すなわち「無差異→同時変容」という遍充式は、カルマについても成立しないので垢についても成立しない。

²⁵ この一節に関して、また関連する以下の「敗北の立場」についても異なる解釈が可能である（英訳参照）。

²⁶ 垢について攻撃した反論者にたいして、定説側がカルマに関してやり返した論証式は、次のように再構成される。

【主張】〔主宰神は〕カルマを全ての個我に同時に変容させることになつてしまう。

なる生で享受されること、激しい勢いを持つものとして別のカルマに比べて「あるカルマが」より強力であることという——違いが存在するからである

【答】以上のようにこれ（カルマ）に関して、この理由（「違いがないから」）が不定であることについて〔反論者が〕答えるならば、その人にとり、多数性・別の時（生）で享受されること・強度に差異があることは、解決策になつてない。

【問】どうしてか。

【答】その〔三つの〕解決策は、論証される基体〔である垢〕においても捨てられてない、すなわち、存在するからである——というのは、垢についてもこの理由（「違いがないので」）は〔やはり〕不成立なので、正しい論証因ではないという意味である。というのも、それ（垢）の場合も、個我毎に〔垢の〕能力が異なるので複数性があるからである。また別の時（生）に変容するという本性を有するからである。また〔垢が〕より急激な——〈正しい行為〉等の実行等という補助因が揃うことで成立した——変容を本性とすることが或る個我にあるが、全ての個我にあるわけではないからである。というわけで過失はない。

しかも、

24-25. 全ての変容体を生じさせうる能力は、主宰神と種子（根本物質）とに常に臨在するので、また、輪廻する〔個我〕は遍在者であり、享受者であるので、かの主宰神は、結果・器官（微細・粗大な身体）などの集合を多数、種子から作った後に、同時に個我に全てのカルマを享受させるとすればよい。

主宰神の能力により、また、根本物質の能力により、この理由（「違いがないので」）は不定である²⁷。なぜならあなたの立場において、それ（能力）は、あらゆる所にあらゆる事物を作るものとして臨在することに違いはないので、また、享受主体は遍在者としてあらゆる所に存在するので、かの主が同時に、結果・器官の集合全てと〈個我〉達を結び付けてから、全てのカルマを熟成させて享受させるということが、どうしてないだろうか。以上の理由による。

【理由】違いがないので。

これにたいして反論者は「違いがないので」という理由が、カルマの場合には当てはまらないことを示している。

²⁷ここで定説側が念頭に置いている論証式は以下のものである。

【主張】〔主宰神は〕カルマを全ての個我に同時に変容・熟成させることになつてしまふ。

【理由】違いがないので。

すなわち「無差異→同時変容」という遍充式を反論者は前提としている。これにたいして定説側は、主宰神の能力、根本物質の能力によってこの遍充が不定となることを指摘している。すなわち、主宰神の能力、根本物質の能力は、違いがないにもかかわらず同時変容を結果することはない。

これにたいして反論者の意図は、

26abc. 【問】諸々のカルマが順に享受されるのを見てから、「まさにその通りにシャンブはそれらを熟成させている」と我々は推論する。

【問】熟成させる行為主体〔である主宰神〕に違いがないにしても、熟成させられるカルマが、幼児に始まる状態の順をおって享受されるのを〔我々は〕現に見るので、主も、それら（カルマ）の適性を必ず考慮した上で、それらを順に熟成させると〔我々は〕決定する。それゆえ、これ（カルマ）に関してこの理由（「違いがないので」）は不定ではない。というのも（カルマに関して「違いがないので」という理由は）成立しないからである。

【答】これに答える。

26d. 【答】〔カルマと垢の〕いずれについても等しい。

もしそうだとすると、カルマについてと同様、垢についてもこれ（「違いがないので」という理由）が成立しないというこのことは等しくあてはまる。というわけで、ここでも問題はない。

【問】どういうわけですか。

【答】というのに答える。

27. [カルマに関して] 結果（熟成）が説かれたが、それは停止に導くものとして垢についても、ここ（教典）で理解されるからである。また大主宰神は〔カルマの場合と〕全く同じ様に〔垢の〕適性を作ることができると〔いう理由からである〕。

というのも——カルマに関して、それが持つ適性のみにより順をおって特定の熟成〔段階〕という結果があると〔君が〕説いたのと全く同じ様に、垢についても順をおって、すなわち全く同様に、解脱を望む者などが現に見られることが別の仕方では説明がつかないことがから証明されるものとして、順をおって特定の変容〔段階〕という結果のあることが、これなる教典においてやはり理解されている——からである。聖なる『スヴァーヤンブヴァ』に説かれている通りである。

それが滅すると、最高の至福へ行こうとする欲求が生じるだろう。

またちょうど大主宰神が享受のためにカルマが適性順に熟成する原因であるのと同じように、垢についても彼こそが熟成をもたらす原因であるので、「違いがないので」というこの理由は、〔カルマに関してと同様〕これ（垢）についても成立しない。というわけで問題はない。

4.3.2 帰滅・睡眠時

ここ（世界創造・存続時）のみならず更には

28. 睡眠時も原質とカルマとの適性が、存続時と同じ長さを【回復に】必要とすることについて問われたならば、あなた（反論者）は同じ様に答えざるを得ない。

すなわち、原質は休みなく無数の個我に享受を与えることでその能力が次第にやつれていくので、またカルマはその時、能力が次第にやつれていく個我に行使されることでその能力が次第にやつれていくので、享受を与えるには適さなくなる。それゆえ、その適性を生み出すために、それ（原質・カルマ）を休息させるものとして大帰滅があると、あなたは認めなければならない。聖なる『ムリゲーノドラ』に述べられている通りである。

睡眠時にも彼は、目覚めさせるに適したもの達を目覚めさせ続け、閉じ込めるに相応しいもの達を閉じ込め続け、カルマを持つ【個我】のカルマを熟成させ続け、根本物質の諸能力を開顕に適するようにし続ける。彼は全てをありのままに見る。

それならば違いがないのだから、主は、一瞬のうちにそれ（原質）を回収し諸カルマを休息させ、再創造を行なうように、どうしてしないのか。何のために創造と同じ時間を、そこで必要とするのか。というわけで、ここでもあなたは、原質がそのような本性を持つ【からという理由】に従って、これ（原質・カルマ）について「違いがない【という証因】が不成立である」という同じ答えを述べざるを得ない。そしてそれは、垢に関する上記の論理で【同じく当てはまり】違いはない。というわけで矛盾はない。

4.3.3 創造開始時

同様に、

29-30ab. また無限にある〈創造開始時〉に、【根本物質の】流れの中から或る仕方で或るもののが或る時間かけて生じるが、それをその仕方でその時間をかけて主宰神は作ることができる。このことは、解脱においても、その【解脱の】機因【である垢の熟成】に関して等しく当てはまる。

前、前の前などと区別することで無数にある〈創造開始時〉に、主は、〈根本物質の流れ〉という諸機因から、限定的行為能力など【を直接生じさせるの】と同様に、違いがないの

だから、[三] 徳性に始まり地に終わる原理群をも、どうして生じさせないのか。何のために彼はそれ（原理群）と下位の原質との関係を必要とするのか。聖なる『ラウラヴァ』に述べられている通りである。

限定的行為能力という原理から欲望と限定的認識能力という二つの原理が生じた。そして未開顕のものも、また [三] 徳性を主は創造した。

[三] 徳性から八徳性を備えた²⁸ 覚が生まれた。そして覚が振動することで更に [覚から] 自我意識が生じた。

いっぽう自我意識から微細な〈微細元素〉群と、諸器官とが、そして微細元素群から諸元素が、[このように] 全てを順をおって彼は創造した²⁹。

それについても、あなたは——それら結果としての事物群のうち、或る事物が、或る仕方で、すなわち、原質によって限定されたやり方で、或る時間をかけて、生起に適したものになる場合、それを、それだけの時間をかけて、そのやり方で主が生じさせるのであって、それ以外ではない——という、これ（原質）について「違いがない [という証因] が不成立である」という答えを述べざるを得ない。するとこれ（違いがないことが不成立であること）は、垢の熟成という〈解脱の機因〉についても等しく当てはまるので、[全個我同時解脱・束縛という] 上記（11と22）の帰結に陥ることはない。それゆえ、どうして、その帰結の回避によって排斥された〈自立的なシャクティの降下〉が成立しようか。

4.4 垢のまとめ

それゆえ以上のように、

30cd-31. 不淨物（垢）の本質が余すところなく十分に説かれた。教典に基づいて [垢の] 単数性など [という本質が説かれたが、その単数性など] は能力の多数性がなければ [垢の存在自体を] 否定してしまう。能力の多数性を主とする [垢の本質] は、原因（シヴァ）から生じた正しい論理に基づいて [説かれたのである]。

シャンブと個我という二原理の異質性の原因である〈不淨物である垢の真実の姿〉を、十分に余すところなく説いた。

²⁸ サーンキヤ理論と同様、buddhi の持つ八つの guṇa とは以下のものである。

| | | | |
|-----------|-----------|---------------|---------------|
| 善 dharma | 知識 jñāna | 離欲 vairāgya | 自在力 aiśvarya |
| 悪 adharma | 無知 ajñāna | 不離欲 avairāgya | 無力 anaiśvarya |

²⁹ 創造の階層については本稿末 Appendix の 36 原理の表を参照。

また、この垢について「教典に基づいて単数性など【の本質が説かれた】」とあるが——聖なる『スヴァーヤンブヴァ』に説かれている通りである。

さて無始なる【単数の】垢は【複数の】個我の家畜性であると説かれた。

なぜなら、そこでは、垢が单数形で、個我が複数形で示されているので、すべての個我に单一の垢があると示されているからである。【「単数性など」と「など」を用いることで【垢が】〈変容すること〉が【理解させられている】。同じそこ（スヴァーヤンブヴァ）で説かれている通りである。

それが滅すると、【最高の至福へ】行こうとする欲求が生じるだろう。

——それ（教典に説かれた垢の単数性等）は、能力の多数性がなければ、垢の否定を結果する、すなわち、垢の非存在を導くものとなってしまう。能力の多数性がなければ、すなわち、垢の能力の多数性をもたないならば、【垢の】存在否定を帰結する、垢の存在否定を導くことになる、という意味である。泥棒が為した【と想定される目の前の】被害を「泥棒の非存在によって為された」とする【ことでは説明がつかない】のと同じ【ように、能力の多数性を想定しなければ、単数である垢の説明がつかない】である³⁰。また単数のものが複数のものを覆うことは、多数の能力を想定することなくしてはありえないからである。だからこそ、能力の多数性を主とする【垢の本質】は、彼の聖典から生じた正しい論理から成立している。このことは前に示した——「垢の能力は個我毎に別々である」と。

5 結

次に本著をまとめる。

32. 人々から無始なる非精神性を取り除くために『スヴァーヤンブヴァ』の註
作者は簡潔に以上のこの〈三原理の確定〉を述べた。

³⁰ 目の前に被害がある。そこから「泥棒のせいに違いない」と想定する。泥棒の存在を想定しなければ目の前の被害は説明がつかない。「泥棒の非存在のせいだ」とするのは理に合わない。同じ様に、単数の垢が現に説明すべきものとして聖典により成立している。そこから垢の能力の多数性が想定される。能力の多数性を想定しなければ単数の垢は説明がつかない。「能力の多数性がない」とするのは理に合わない。（異なる解釈の可能性については英訳を参照。）

| | | | |
|------------|--------|----|------------|
| 説明されるべき現実 | 被害 | —— | 単数の垢 |
| 想定されるべき対象 | 泥棒 | —— | 能力の多数性 |
| 想定すべきでない対象 | 泥棒の非存在 | —— | 能力の多数性の非存在 |

以上この〈三原理の確定〉は、『スヴァーヤンブヴァ』の註作者であるケータパーラによって、人々から非精神性を除くために簡潔に述べられた。

以上、ダールヴァアビサーラに住するカシミールのバッタ・ラーマカンタが、
【人々が】最高原理に到達するよう、『三原理の確定の注解』を著した。

以上、バッタ・シュリー・ナーラーヤナカンタの息子であるバッタ・シュリー・ラーマカンタが著した〈三原理の確定の注解〉が完全に終わった。吉祥。

Appendix: シャイヴァ・シッダンタの36原理

| | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 シヴァ śiva | |
| 2 シャクティ śakti | |
| 3 サダーシヴァ sadāśiva | |
| 4 主宰神 iśvara | |
| 5 純知 vidyā | mantrēśvara, mantra の住処 |
| 6 根本物質 māyā | aṅguṣṭhamātra の住処 |
| 7 限定的行為能力 kalā | māyā から展開 |
| 8 限定的知力 vidyā | kalā から展開 |
| 9 欲望 rāga | kalā から展開 |
| 10 制限 niyati | māyā から展開 |
| 11 時 kāla | māyā から展開 |
| 12 *原質 prakṛti (=avyakta) | kalā から展開 |
| 13 *徳性 guṇa | |
| 14 覚 buddhi | |
| 15 自我意識 ahamkāra | |
| 16 意 manas | |
| 17 耳 śrotra | |
| 18 身 tvac | |
| 19 眼 cakṣus | |
| 20 舌 rasana | |
| 21 鼻 ghrāṇa | |
| 22 口 vāk | |
| 23 手 pāṇi | |
| 24 肛門 pāyu | |
| 25 生殖器 upastha | |
| 26 足 pāda | |
| 27 音 śabda-tanmātra | |
| 28 觸 sparśa-tanmātra | |
| 29 色 rūpa-tanmātra | |
| 30 味 rasa-tanmātra | |
| 31 香 gandha-tanmātra | |
| 32 虚空 ākāśa | |
| 33 風 vāyu | |
| 34 火 tejas | |
| 35 水 ap | |
| 36 地 pr̥thivī | kālāgnirudra の住処 |

*12: puruṣa (=paśutva=mala), 13: prakṛti とすることもある。

<キーワード> Sadyojyotis, Rāmakanṭha, Tattvatrayanirṇaya, Śaivasiddhānta

(九州大学大学院准教授, 博士(文学))